

お告げの MARIA 修道会 まごころ会

2025年4月
Tel.095-846-8300



QRコードから
アクセスして
下さい

『わたしは主のはしたためです。
お言葉どおり、この身になりますように。』

感謝 おかげさまで

お告げの MARIA 修道会 設立 50周年を迎えました

1975年3月25日、「お告げの MARIA 修道会」は
正式修道会として認可を受けました。

神のお告げの祭日の50周年記念日に向けて、3月
16日から24日まで9日間の祈り（ノベナ）を捧げま
した。

そしてノベナ最終日の24日午後7時半から本部
ホールで、「修道会設立50周年記念 テゼを用いた
感謝の祈りの集い」を行いました。

ホールの中央に、十字架のキリストと聖母子像の
イコン、火が灯されたカップソーソクが置かれ、これ
までの歩みと、支えてくださった多くの恩人方、先
輩姉妹方を思い起こし、テゼの歌とみことば、共同
祈願などを織り交ぜながら感謝の祈りをお捧げし
ました。



奥浦修道院
会員帰天のお知らせ
シスターテレジア 濱崎キクエ
3月22日 帰天
修道生活 64年 享年 97歳

「人の思いをはるかに超えて」梅木公子

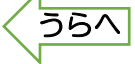
八 辻町に待望の本部完成

こうした中、本部建設の準備も進み、たく
さんの方々のご厚意をいただいで、十字修道
院の隣接地を取得し、1970年2月着工、1971
年8月、竣工した。会計が一本化していない
中での本部建設は大変な苦勞であった。当時
出された通達の文面に、建設費の拠出依頼の
ための支部への氣遣いが読み取れる。会員は
一致協力し、生活費をきりつめて建設費を本
部へ納入した。苦勞を分かち、同じ目的のた
めに祈って、やっとひとつの修道家族である
ことが不自然なことではなくなった。会員は協
力の力に驚き、素直に喜び合った。今では狭
苦しく見える建物が何と大きく立派に見えた
ことだろう。本部はこうして大浦から辻町へ
移転した。学生志願院も本部の三階に移り、
大浦の「サンタマリアの家」を修練院に転用
することになった。期間、人員ともに不規則
だった修練もやっと一年間になりメンバーの
入れ替わりなしに、カリキュラムに沿った修
練ができるようになった。初めは会員の間に
強い抵抗があった転任も、この頃には当然の
こととして受け入れられるようになっていっ
た。

1973年1月、初めて会憲に沿った選挙総会
が開かれ、谷中フジノが会長に選出された。
谷中フジノは所属していた鯛の浦修道院から
本部に移り常住した。新しい本部でやっと組

まごころ会会員帰天、お祈りください

- ・ マグダレナ 野下 トシ子 青砂が浦教会
- ・ トマス 大曾 国之 青砂が浦教会
- ・ パウロ 片山 貞雄 紐差教会
- ・ マリア・マルガリタ 岩谷シメ子 高井旅教会
- ・ マリア 岡 啓子 黒島教会
- ・ アシジのフランシスコ 岩崎 眞 木鉢教会



織が整い始めたが、資料、文書、書類など、未整理のままであったし、会憲、慣例書の見直しも迫られていた。また、会員の霊的生活、霊性を深めることにも力を注がねばならなかった。1974年、教会が定める聖年を祝うため、長崎教区で聖地巡礼が計画され、会長と会員もこれに加わり、時のパウロ六世教皇様から祝福を受けた。あのキリシタンの乙女たちが共同体を作り始めたころ、この日のことを誰が予想できたであろうか。先輩たちの熱いパーパ様への思い、ローマと聖地へのあこがれが100年を経て実現したのだった。

九 お告げのマリア修道会へ



里脇大司教様もまた、ローマ教皇庁認可の正式修道会への準備を進めて下さっていた。1975年1月2日、法的設立の認可をローマに申請して下さい、3月17日教皇使節より設立認可書が届けられた。3月25日、会の名称を「お告げのマリア修道会」と改め、正式修道会として発足、本部では、里脇大司教様をお迎えして記念式典が行われた。10月19日には一斉に修道服を着用し、それぞれの小教区で親族を招いて着衣を祝った。会員の服装は、明治から大正にかけては木綿の着物に三幅前かけ、昭和になって、裾の長い黒衣を着用したこともあったが、おおむね一般人と変わらなかった。聖姉妹会に統合してからは、白いブラウスに黒のスーツ、それに黒ひもで胸につるした十字架が正式の服装とされていた。修道服着用については大半が不賛成で、公会議後は多くの修道会が修道服を脱ぎ始めていたこともあって、時代に逆行するようにも思えたが、あえて着用に踏み切った。これは修道者の身分を自覚し、証しするため

に正解だった。また、これまで、あねさん、おばさん、○○さんなどと呼び合っていたものをシスターと呼ぶよう統一した。新しい会憲づくりには里脇大司教様自ら取り組んで下さり、新しい教会に相応しく、福音に照らした、深く、幅のある会憲となった。会計が一本化され、支部収入を本部に納入し、支部は共住費で生活するようになった。

1978年、松永師が司教に叙階されたため、中島政利師を聖務司祭にいただくことになった。また、1980年には、里脇大司教様が枢機卿になられた。多くの方々の指導をいただきながら、会員の霊的な面も少しずつ成長したが、これに大きく貢献したのは「祈りの家」である。本部が完成してからは、持ち回りの黙想会がなくなって、本部で一括して黙想が行なわれるようになったものの、大部屋に所狭しと寝泊まりしながらだったので、沈黙のうち祈るといふ本来の黙想の形にはほど遠かった。「祈りの家」をもつことは会員の霊性の向上に不可欠だった。年佐世保に「祈りの家」が完成し、8日間、個室で体と心を休めて神と語らう日々は、会員を祈りの深みに誘い、霊性を深めていった。1977年初期修練が2年間に、終生誓願修練が1年間になり、奉献生活はさらに深められていった。こうして修道生活が充実していく中、事業の面でも変化があった。日本のGNP、国民生産高は世界のトップレベルになり、高齢化、少子化が進んだ。こうした社会の動きに沿って、新たに老人ホームが事業に加わり、幼稚園、保育園、養護施設の子供に対する教育も高度化した。孤児たちを病気から守るために生まれた診療所も病院に昇格して地域にしっかり根を下ろした。